

英語の教室活動に対する中学生の本音：  
英語嫌いにしないためのヒント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲葉, みどり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/9414">http://hdl.handle.net/10297/9414</a>

## 【論文】

## 英語の教室活動に対する中学生の本音

## — 英語嫌いにしないためのヒント —

稲葉 みどり

愛知教育大学教育学部

## 要旨

本研究では、外国語(英語)の授業でよく用いられる教室活動(学習法/指導法)等について、学習者(中学1~3年生)と教師(中学校教師)の捉え方(好む活動、好まない活動)が一致しているかどうかを調査した。22項目の教室活動等を提示し、中学生には学ぶ立場からそれぞれの方法で学びたいかどうかを回答してもらった。中学校教員には、教える立場からそれぞれの方法が良いと思うかどうかを回答してもらった。リッカートスケールを用いた回答を、学習者と教師間、学年間、クラス間、学校間、項目間等で比較し、中学生が好む活動、教師が良いと思う活動を分析した。その結果、次のようなことが明らかになった。中学生は、「文法説明」「教師が読む」「教師が説明」など、教師主導の指導法を好む傾向が見られ、「発表する」「学習者間でやりとりする」「ロールプレイ」「質問に答える」等のコミュニケーションを通して学ぶようなスタイルの学習法はあまり好まない傾向が見られた。誤りの訂正においては、中学生はすぐに直してもらうのを強く望んでいるのに対して、教師は訂正に慎重な姿勢を見せた。中学生の好む学習法と教師が良いと考える指導法には、負の相関が見られ、中学生が好む学習法ほど教師の支持率は低く、逆に、教師が良いと思う指導法ほど中学生には支持されない傾向が見られた。また、本調査で提示した教室活動の好き嫌いの序列は、学年間、学校間、クラス間で類似していることが分かった。しかし、中学生があまり支持しない9項目の各支持率をクラス間で比較すると、全体に低いクラスと高いクラスが見られ、否定的な意識の強いクラスと弱いクラスがあることが分かった。これらの結果から、生徒と教師の教室活動に関する捉え方は必ずしも一致していないことが明らかになった。しかし、本調査は、限られた範囲のものであり、好みの傾向を一般化することは難しく、また、生徒の好みの方法で授業を行うことが必ずしも教育的効果に繋がるとは言えないが、授業案、指導案を立てる際には、教師は自分の担当するクラスの生徒がどのような指導法や学習法を希望しているかを把握しておくことは大切ではないかと考える。

## キーワード

英語嫌い、教室活動、教科開発学、英語指導法、ピリーフ、本音

## 1. はじめに

小学校でも英語教育が本格的に導入され、教育の現場において教師はどのように教えたら効果的かを模索していることであろう。授業計画、目標設定、導入や練習の方法、会話やコミュニケーション活動の進め方、そして評価に至るまで、様々な課題に取り組まなければならない。そして、中学校への橋渡しの中で注目されるのが、早期に「英語嫌い」をつくらないことである。そのため、読み書きの指導はある程度制限されているのが現状である。しかし、読み書きを強要しさえしなければ、英語嫌いになることを防げるかどうかは疑問である。

そこで、学習者と教師が心をひとつにして向き合える授業をつくるには、最低限どのようなことに留意したら良いかの糸口を探るため、本研究に着手した。どのような素晴らしい指導法でも教えられる側に受け入れられな

ければ効果が薄いのではないかと、教師が良いと信じて行っている教室活動は、学習者も同じように感じているのだろうか、学習者が望んでいる教室活動や学習方法を教師はどのように捉えているのだろうか等は、調べて見ないと分からないと思ったからである。

本研究では、学習者と教師の意識が実際に一致しているかどうかを調査した。外国語(英語)の授業でよく行われる指導法や教室活動等を取り上げ、中学1~3年生には、学ぶ立場(指導を受ける立場)からその方法で学びたいかどうかを尋ねた。中学校教員には、教える立場から各教室活動が良いと思うかどうかを聞いた。そして、どちらもリッカートスケールで回答してもらった。その結果、中学生の好む(希望する)教室活動と教師が良いと考える教室活動とは必ずしも一致せず、逆に好みの序列には負の相関が見られた。本稿ではこの調査結果を詳

しく報告し、授業を構成する際教師が留意すべき点等について述べる。

## 2. 先行研究

外国語の授業づくりにおいて、どのような教室活動が有効かを考えたり、導入方法や練習方法を選択したりするとき、その判断や意志決定の拠り所になるのがピリーフである。ピリーフとは、言語学習の方法や効果等について人々が自覚的あるいは無自覚的に持っている信念や確信 (Richards and Lockhart, 1994) のことである。外国語教育において、言語プログラムやカリキュラムに関する教師のピリーフは、授業計画、目標設定、評価や効果の測定等にも影響を及ぼす (Pajares, 1992; Brog, 2001) と考えられている。また、学習者の持つピリーフは自身の外国語学習に影響を与えとも言われている (Horwitz, 1987)。したがって、これまで教師や学習者のピリーフに関しては、先行研究で様々な角度から取り上げられてきた。その中で BALLI (Horwitz, 1985; 1987) を用いた調査は、国内や海外で多く見られる。

学習者のピリーフに関する研究には、糸井 (2003)、佐藤 (2006)、稲葉 (2014) 等がある。また、教師のピリーフに関する研究には、岡崎 (2001)、波多野 (2010)、稲葉 (2015) 等がある。教師と学習者の持つピリーフを比較した研究には、稲葉 (2013) がある。

その他、国・地域、文化・社会的な背景によってピリーフが異なることを提示した研究も見られる (小原・桑原, 2008; 岩井・岩澤, 2004; 片桐, 2005; 坂井, 2000、和田, 2007; 高崎, 2014)。さらに、教師のピリーフ形成に及ぼす要因に着目した研究として、Farrel (2007)、Borg (2006)、笹島・ボーグ (2009) 等が見られる。

よって、本研究では、具体的な教室活動や指導法を取り上げて、それらに対する学習者と教師の意識を調査して比較することにする。

## 3. 研究の方法

### 3. 1 研究課題

本研究では英語の授業で一般的によく行われる 22 項目 (3.3 参照) の指導方法、学習方法、コミュニケーション活動等の教室活動 (以下、教室活動等と呼ぶ) について、中学生と中学校教師がどのように捉えているかをアンケート調査により明らかにする。調査では、様々な教室活動について、学習者側にはその方法で学びたいと思うかどうか、教師側には教え方として良いと思うかどうかをリッカートスケールで回答する形式を用いる。結果は、以下の手順で考察する。

- (1) 中学生全体の傾向
- (2) 中学生と中学校教師の比較

- (3) 中学生の学年間の比較
- (4) クラス間の比較
- (5) 学校間の比較
- (6) 項目間の比較
- (7) 中学生の好む教室活動
- (8) 中学生の好まない教室活動
- (9) 教師が良いと思う教室活動
- (10) 授業づくりで大切なこと

### 3. 2 被験者

調査は、愛知県内の二つの公立中学校の生徒、及び、教員を対象として実施した。中学生は小牧市内の P 中学校の 1~3 年各 1 クラス (合計 93 人)、及び、名古屋市内の Q 中学校<sup>1</sup> の 2 年生 3 クラスと 3 年生 1 クラス (合計 133 人)、合計 135 人、総計 228 人である。教員<sup>2</sup> は小牧市内の中学校の現職教員 22 名である。教職歴は 0.6~38 年 (平均 14.7 年) である。年齢構成は、20 代 8 人、30 代 4 人、40 代 0 人、50 代 6 人、60 代 1 人、無回答 2 人である。担当教科は 1 人 (養護) を除き、英語である。【表 1】に各グループの人数と表中のグループ識別記号を示した。

【表 1】被験者の概要

被験者	識別記号	人数 (n)
P 中学校		
1 年 P 組	1P	30
2 年 P 組	2P	30
3 年 P 組	3P	33
Q 中学校		
2 年 A 組	2A	33
2 年 B 組	2B	32
2 年 C 組	2C	33
3 年 A 組	3A	35
中学生総計		226
中学校教師	TR	22

### 3. 3 アンケート調査の内容

中学生に対するアンケート調査は、外国語 (英語) の学習に関する 36 項目の質問で構成されている。この中の 22 項目は、学習の仕方や教え方に関する質問、8 項目は外国語 (英語) 学習のピリーフに関する質問、残りの 6 項目は、外国語学習に伴う様々な感情や気持ちに関する質問である。学習の仕方や教え方に関する質問は、久保田 (2006: 38) の教授法に関する質問を学習者の好み、または希望する学習法を答える内容の質問に作り変えて作成した。ピリーフに関する 8 項目の質問は、BALLI (Horwitz, 1985; 1987) の中から選んだ。最後の 6 項目は記述式で、Lightbown and Spada (1993) の「言語学習に関するよくある考え方の 12 の質問」を参考にして作成した。本稿では、学習の仕方や教え方に関する 22 項目について考察する。

中学生に対する質問文は、「これは外国語 (英語) の

学習のしかたや教え方に関する質問です。あなたはどのような学習方法や教え方で学びたいと思いますか」で、学ぶ立場から捉えた質問になっている。回答は、4段階(「1.まったくそう思わない」「2.あまりそう思わない」「3.少しそう思う」「4.強くそう思う」/「1.全くそうしてほしくない」「2.そうしてほしくない」「3.そうしてほしい」「4.とてもそうしてほしい」)のリッカートスケールを用いた。ここでは中学生にどちらかに決定してもらうために「どちらともいえない」の旨の選択肢は省いたので、4段階のスケールになっている。また、1~4のスケールに用いる言葉も柔らかい表現を用いた。これは、アンケート実施の打ち合わせにおいて、中学校教師からの助言を取り入れたものである。

教師に対するアンケート調査は、教授観、学習観等に関する125の調査項目で構成されている。これには、中学生を対象とする36項目も含まれている。本稿では、この中の共通の18項目を考察する。

教師に対する質問文は、「次は、外国語の教え方に関する質問です。あなたは教師としてどのような教え方が良いと思いますか」で、教える立場から捉えた質問になっている。回答は、5段階(「1.強く反対する」「2.反対する」「3.同意も反対もしない」「4.同意する」「5.強く同意する」)のリッカートスケールである。

質問は、以下の22項目である。項目⑰、⑱、⑳、㉑は中学生のみで、教師の質問にはない。質問の後の( )内の用語は本論文中で用いる略称を示す。これらの質問は、中学生にとっては学習法、教師にとっては指導法になる。よって本論文中では、中学生に対する質問を「学習法」と呼び、教師に対する質問を「指導法」と呼ぶことにする。

- ① 教師が教科書を声に出して読む(教師が読む)
- ② 学習者が教科書を声に出して読む(学習者が読む)
- ③ 発音練習をする(発音練習)
- ④ 詳しい文法説明を受ける(文法説明)
- ⑤ 教師の質問に外国語で答える(質問に答える)
- ⑥ 教師が外国語を日本語(母語)に訳す(教師が訳す)
- ⑦ 学習者が外国語を日本語(母語)に訳す(学習者が訳す)
- ⑧ 教師が語彙(単語/語句)の意味を母語で説明する(教師説明)
- ⑨ 学習者が文をつくって書く(文を書く)
- ⑩ 会話文を暗記する(会話文暗記)
- ⑪ ロールプレイをする(ロールプレイ)
- ⑫ ペアワークやグループワークをする(ペアワーク)
- ⑬ 実際に近い場面を作り会話練習をする(会話練習)
- ⑭ 学習者が発表をする(発表)
- ⑮ 歌やゲームをする(歌やゲーム)
- ⑯ 試験をする(試験)

- ⑰ 語彙(単語/語句)を覚える/暗記する(語彙を暗記)
- ⑱ 外国語が話されているのを聞く(会話を聞く)
- ⑲ 外国語を何回も繰り返し言って練習する(繰り返し練習)
- ⑳ 学習者間で外国語でやりとりする(学習者間)
- ㉑ 外国語の誤りはその場ですぐに直してもらう(すぐ直す)
- ㉒ 外国語の誤りは人前で直さないで後で直す(後で直す)

結果は、平均値を算出し、4段階で回答する中学生の場合は1.00~4.00、5段階で回答する教師の場合は1.00~5.00で示した。さらに、両者を比較するために、平均値を%(100)に換算して示した。以下の分析では、割合を「支持/支持率」という用語を用いて記述することにする。

#### 4. 結果と考察1:グループ間の比較

##### 4.1 中学生全体の傾向

まず、これらの22項目の学習法について中学生がそうしてほしいと希望しているか、希望していないかを回答の支持率から見てみる。【表2】は22項目の質問に対する中学生全体226人の各質問に対する回答の割合(%)と平均値(1.00~4.00)を示している。割合は、数値が高いほど肯定的(そうしてほしい)と解釈できる。平均値は「4.00」に近いほどその質問に対して肯定的、「1.00」に近いほど否定的(そうしてほしくない)であることを示している。

【表2】中学生全体の回答の割合(%)と平均値の分布

項目	略称	中学生全体%	平均値(1.00~4.00)
①	教師が読む	82.95	3.32
②	学習者が読む	79.10	3.16
③	発音練習	80.60	3.22
④	文法説明	83.37	3.33
⑤	質問に答える	63.50	2.54
⑥	学習者が訳す	77.60	3.10
⑦	教師が訳す	73.39	2.94
⑧	教師が説明	81.55	3.26
⑨	文を書く	65.88	2.64
⑩	会話文を暗記	65.41	2.62
⑪	ロールプレイ	63.23	2.53
⑫	ペアワーク	75.28	3.01
⑬	会話練習	67.03	2.68
⑭	発表する	57.29	2.29
⑮	歌やゲーム	79.28	3.17
⑯	試験	62.76	2.51
⑰	語彙を暗記	77.40	3.10
⑱	外国語を聞く	79.50	3.18
⑲	繰り返し練習	77.50	3.10
⑳	学習者間	61.32	2.45
㉑	誤りすぐ直す	81.90	3.28
㉒	誤り後で直す	50.63	2.03
平均		72.11	2.88
SD		9.52	0.38



中学生全体の割合の平均は72.11% (平均値2.88) で、7割以上がこれらの学習法を支持していると考えられる。一方、逆に解釈すれば、支持していない人が3割程度いるということである。最大値は、83.37% (3.33)、最小値50.63% (2.03) で、支持率には項目間で差が見られる(検定)。支持率の一番高いのは、項目④(83.37%)の「文法説明」である。一番低いのは、項目②(50.63%)の「後で直す」である。この結果から分かることは、これらの学習法には、希望する(そうしてほしいと思う)ものと希望しない(そうしてほしくない)ものがあることである。この結果から見ると、中学生は「文法説明」をしてほしいと強く思っているが、「誤りを後で直す」ことはしてほしくないと思っているということである。

#### 4. 2 中学生と教師の比較

次に中学生全体の学習法に対する指向と教師の指導法に対する指向を比較し、違いがあるかどうか見る。【表3】は22項目の質問に対する中学生全体226人の各質問に対する回答の割合(%), 及び、中学校教師の22人の回答の割合(%)と平均値(1.00~5.00)を中学生の回答の割合を基準として昇順で示している。教師は5段階のスケールで、平均値は1~5の平均である。割合は、数値が高いほど肯定的(良いと思う)と解釈できる。平均値は「5.00」に近いほどその質問に対して肯定的、「1.00」に近いほど否定的(良いと思わない)であることを示している<sup>3</sup>。

【表3】中学生全体(昇順)と教師の割合(%)の比較

項目	略称	中学生全体%	教師%	教師平均値(1.00~5.00)
②	後で直す	50.63	—	—
⑭	発表する	57.29	82.00	4.10
⑳	学習者間	61.32	—	—
⑯	試験	62.76	70.00	3.50
⑪	ロールプレイ	63.23	83.00	4.15
⑤	質問応答	63.50	83.00	4.15
⑩	会話文暗記	65.41	74.00	3.70
⑨	文を書く	65.88	88.67	4.43
⑬	会話練習	67.03	89.00	4.45
⑦	教師が訳す	73.39	54.00	2.70
⑫	ペアワーク	75.28	88.00	4.40
⑰	語彙暗記	77.40	—	—
⑱	繰り返し練習	77.50	78.00	3.90
⑥	学習者が訳す	77.60	51.00	2.55
②	学習者が読む	79.10	87.00	4.35
⑮	歌やゲーム	79.28	76.00	3.80
⑱	会話を聞く	79.50	—	—
③	発音練習	80.60	86.00	4.30
⑧	教師説明	81.55	59.00	2.95
㉑	すぐ直す	81.90	58.00	2.90
①	教師が読む	82.95	83.85	4.00
④	文法説明	83.37	61.00	3.05
平均		72.11	74.87	3.57
SD		9.52	12.98	0.63

教師の割合の平均は74.87% (平均値3.57) で、中学生と同様7割以上がこれらの指導法を支持していると考えられる。最大値は、89.00% (4.45)、最小値51.00% (2.55) で、項目間で支持率に差が見られる。支持率の一番高いのは、項目⑬(89.00%)の「会話練習」、一番低いのは、項目⑥(51.00%)の「学習者が訳す」である。この結果から、これらの指導法には教師が良いと思うものと、良いと思わないものがあることが分かる。

中学生と比較すると、平均支持率にはあまり差がないが、標準偏差(SD)は、中学生9.52、教師12.98で開きがあり、教師のほうが項目の支持率のバラツキは大きいといえる。

中学生が支持する項目と教師の支持する項目を比較すると、必ずしも一致していない。例えば、項目④「文法説明」、項目㉑「すぐ直す」、項目⑧「教師説明」は、中学生には8割以上の支持を得ているが、教師には6割前後しか支持されていない。逆に、中学生にはあまり支持されていない項目⑭「発表する」、項目⑪「ロールプレイ」、項目⑤「質問応答」は、教師から8割以上の支持を得ている。

そこで、中学生が支持する項目と教師が支持する項目の間に相関があるかどうかを調べてみる。ここでは、スピアマンの順位相関係数を用いて、両者の相関を判定することにする。

【表4】は、中学生全体と教師の割合(平均値)の間におけるスピアマンの順位相関係数を示している。順位相関係数は、-0.2932で、マイナスの値である。したがって、正の相関は見られず、非常に弱い負の相関(反相関)の傾向が見られる。これは、中学生の支持率の高い項目ほど教師の支持率が低いという傾向である。換言すれば、教師が良いと考える指導法ほど、生徒が希望する学習法ではなく、その順位が反対となる傾向が少し見られるということである。よって、中学生全体と教師の間には、これらの学習法/指導法に関して「支持する」という点では同じような傾向はなく、むしろ反対の傾向が見られることが明らかになった。

【表4】中学生と教師間のスピアマンの順位相関係数

クラス	2ABCP	
中学生全体	—	-0.2932
中学校教師	—	

順位相関係数の検定 [\*、P<0.05 \*\*、P<0.01]

#### 4. 3 中学生の学年間の比較

ここでは、中学生の学習法に対する支持率の傾向が学年によって異なるかどうかを見る。【表5】は22項目の質問に対する回答の割合(%)を1~3の学年別に集計したものである。結果を見ると、平均値は、1年生

73.71%、2年生71.16%、3年生75.25%で、3年生の平均が一番高いが、どの学年も7割以上の支持率でそれほど大きな差はない。

1年生に一番支持されているのは、項目⑮の「歌やゲーム」で、90.00%の高い支持を得ている。小学校でこのような学習法に馴染んでいるからかもしれない。2年生に一番支持されているのは、項目④の「文法説明」で、83.38%である。3年生に一番支持されているのは、同じく項目④の「文法説明」で、95.23%の数値は全体でも一番高い支持率となっている。

一方、一番支持されていない項目を見ると、1年生から3年生まで全て同じで、項目⑳の「後で直す」で、5割～6割の支持率である。

【表5】中学生の回答の学年別割合(%)の比較

項目	1P (%)	2ABCP (%)	3AP (%)
①	87.50	82.19	81.24
②	79.17	78.32	77.44
③	76.67	79.01	85.98
④	71.67	83.38	95.23
⑤	72.50	60.34	68.80
⑥	82.50	77.57	76.20
⑦	73.33	73.01	79.55
⑧	83.33	82.21	81.93
⑨	65.00	65.79	68.42
⑩	60.83	66.12	63.87
⑪	70.00	59.70	70.14
⑫	80.00	73.63	80.24
⑬	73.33	65.25	72.56
⑭	55.00	58.43	63.48
⑮	90.00	78.20	75.06
⑯	64.17	61.13	65.75
⑰	74.17	77.37	81.65
⑱	84.17	77.67	82.74
⑲	77.50	76.34	79.71
⑳	64.17	59.69	65.08
㉑	87.50	79.73	83.41
㉒	49.17	50.44	57.11
平均	73.71	71.16	75.25
SD	10.72	9.63	9.10

3つの学年間で割合の高低(支持の傾向)に相関があるかどうかをスピアマンの順位相関係数を算出して見てみる。【表6】は、中学1年生、2年生、3年生のグループ間におけるスピアマンの順位相関係数を示している。1年生と2年生の間の順位相関係数は0.7686で、 $P<0.01$ 水準で有意な相関が見られる。1年生と3年生の間の順位相関係数は0.7121で、 $P<0.01$ 水準で有意な相関が見られる。2年生と3年生の間の順位相関係数は0.8690で、 $P<0.01$ 水準で有意な相関が見られる。よって、どの学年間においても有意な順位相関が見られた。以上から、これらの22項目の支持の傾向は学年によって差はなく、3学年間で類似していることが分かった。

【表6】学年間のスピアマンの順位相関係数

	1P	2ABCP	3AP
1P	—	0.7686	0.7121
2ABCP	**	—	0.8690
3AP	**	**	—

順位相関係数の検定 [\*、 $P<0.05$  \*\*、 $P<0.01$ ]

#### 4.4 中学生の学校間の比較

ここでは、中学生の学習法に対する支持率の傾向が学校間で異なるかどうかを見てみる。【表7】はA中学校とB中学校の3年生の生徒の22項目の質問に対する回答の割合(%)、及び、両クラスの割合の平均を示している。

平均値は、A中学校で74.32%、B中学校76.19%でどちらの中学校も同じぐらいの割合である。

A中学校の3年生に一番支持されているのは、項目④の「文法説明」で、95.00%の高い支持を得ている。B中学校の場合も同じく項目④で、95.45%である。両校ともに非常に高い支持率を示している。

一方、一番支持率の低い項目を見ると、A中学校では項目㉒「後で直す」の49.17%、B中学校でも同じく項目㉒の50.44%で、支持率も近似である。

【表7】中学3年生の学校間の割合(%)の比較

項目	3A (%)	3B (%)
①	81.43	81.06
②	82.14	72.73
③	90.91	81.06
④	95.00	95.45
⑤	67.14	70.45
⑥	72.86	79.55
⑦	75.00	84.09
⑧	77.14	86.72
⑨	67.14	69.70
⑩	67.14	60.61
⑪	70.59	69.70
⑫	77.14	83.33
⑬	67.86	77.27
⑭	55.00	71.97
⑮	72.86	77.27
⑯	67.86	63.64
⑰	80.71	82.58
⑱	82.14	83.33
⑲	82.14	77.27
⑳	65.00	65.15
㉑	85.00	81.82
㉒	52.86	61.36
平均	74.32	76.19
SD	10.43	8.92

2つの学校間の3年生の割合の高低(支持の傾向)に相関があるかどうかをスピアマンの順位相関係数を算出して見てみる。【表8】は、A中学校とB中学校の3年生のグループ間におけるスピアマンの順位相関係数を示している。両者の間の順位相関係数は0.7449で、

P<0.01 水準で有意な相関が見られる。よって、これらの22項目の支持の傾向は両中学校の3学年間で類似していると言え、学校間での差異は見られない。

【表8】3年生の学校間のスピアマンの順位相関係数

3年生	3A	3B
3A	—	0.7449
3B	**	—

順位相関係数の検定 [\* , P<0.05 \*\* , P<0.01]

さらに、A中学校とB中学校の2年生についても傾向が似ているかどうかを調べる。【表9】はA中学校とB中学校の2年生の22項目の質問に対する回答の割合(%)、及び、両クラスの割合の平均を示している。

平均値は、A中学校で69.88%、B中学校74.99%で、B中学校の方が少し高い。A中学校の2年生に一番支持されているのは、項目④の「文法説明」で、83.59%である。B中学校の2年生に一番支持されているのは、項目⑮「歌やゲーム」で89.17%である。

一方、一番支持されていない項目を見ると、A中学校、B中学校共に項目⑳「後で直す」の49.17%、B中学校でも同じく項目㉒で51.67%で、どちらも5割程度の類似した支持率である。

【表9】中学2年生の学校間の割合(%)の比較

項目	2ABC (%)	2P (%)
①	80.70	86.67
②	76.37	84.17
③	78.13	81.67
④	83.59	82.76
⑤	59.90	61.67
⑥	77.86	76.67
⑦	74.07	69.83
⑧	81.01	85.83
⑨	62.37	76.04
⑩	65.10	69.17
⑪	59.32	60.83
⑫	72.06	78.33
⑬	61.45	76.67
⑭	51.52	79.17
⑮	74.55	89.17
⑯	61.97	58.62
⑰	75.39	83.33
⑱	77.45	78.33
⑲	75.95	77.50
⑳	57.92	65.00
㉑	80.75	76.67
㉒	50.03	51.67
平均	69.88	74.99
SD	10.21	10.05

ここでも、両学校の2年生の割合の高低(支持の傾向)に相関があるかどうかを見てみる。【表10】は、A中学校とB中学校の2年生のグループ間におけるスピアマ

ンの順位相関係数を示している。両者の間の順位相関係数は0.6678で、P<0.01 水準で有意な相関が見られる。

よって、これらの22項目の支持の傾向は両中学校の2学年間で類似していると言え、学校間での差異は見られないことが分かった。

【表10】3年生の学校間のスピアマンの順位相関係数

2年生	2ABC	2P
2ABC	—	0.6678
2P	**	—

順位相関係数の検定 [\* , P<0.05 \*\* , P<0.01]

#### 4. 5 中学生のクラス間の比較

ここでは、中学生の学習法に対する支持率の傾向がクラス間で異なるかどうかを見てみる。3年生については、前節【表7】に結果を示し、差異がないことを示したので、ここでは、2校の2年生4クラスを比較する。【表11】はA中学校とB中学校の2年生の4クラスの22項目の質問への回答の割合(%)をクラス別に示したものである。

【表11】中学2年生のクラス間の割合(%)の比較

項目	2A (%)	2B (%)	2C (%)	2P (%)
①	71.77	85.16	85.16	86.67
②	67.19	80.47	81.45	84.17
③	65.63	84.38	84.38	81.67
④	71.88	89.84	89.06	82.76
⑤	47.66	68.75	63.28	61.67
⑥	78.13	77.34	78.13	76.67
⑦	64.39	80.47	77.34	69.83
⑧	73.48	82.81	86.72	85.83
⑨	51.52	71.88	63.71	76.04
⑩	52.34	75.78	67.19	69.17
⑪	45.16	75.00	57.81	60.83
⑫	56.82	83.59	75.78	78.33
⑬	46.21	70.16	67.97	76.67
⑭	38.64	59.68	56.25	79.17
⑮	68.18	77.34	78.13	89.17
⑯	50.76	64.84	70.31	58.62
⑰	62.88	83.59	79.69	83.33
⑱	65.15	83.59	83.59	78.33
⑲	59.09	82.81	85.94	77.50
⑳	40.15	71.09	62.50	65.00
㉑	72.73	85.16	84.38	76.67
㉒	46.97	60.94	42.19	51.67
平均	58.94	77.03	73.68	74.99
SD	11.84	8.34	12.22	10.05

各クラスの平均値は、一番高いのが2Bで、77.03%、一番低いのが2Aで58.94%である。これらの2クラスは同じ中学校であるが、平均の割合に差が見られる。

次に、項目の支持率を見る。高いのは、2Aでは、項目⑥「学習者が訳す」の78.13%、2Bでは、項目④「文法説明」の89.84%、2Cでは、項目④「文法説明」の

89.06%、2Pでは、項目⑮「歌やゲーム」の89.17%である。

一方支持率の低いのは、2Aでは、項目⑳「学習者間」の40.15%、2Bでは、項目⑭「発表する」の59.68%、2Cでは、項目㉒「後で直す」の42.19%、2Pでは、同じく項目㉒の51.67%である。よって支持率の高い項目に多少の違いが見られる。

これらの2年生の割合の高低（支持の傾向）に相関があるかどうかをしてみる。【表12】は、2年生の4グループ間におけるスピアマンの順位相関係数を示している。全てのクラス間で相関係数が高く、有意である。特に2Aと2Cでは、順位相関係数は0.8435、2Bと2Cでは、0.8621とどちらも係数が高く、強い順位相関を示している。よって、これらのクラス間では、支持率の順位は類似していると言える。

【表12】 2年生クラス間のスピアマンの順位相関係数

	2A	2B	2C	2P
2A	—	0.7578	0.8435	0.6192
2B	**	—	0.8621	0.6200
2C	**	**	—	0.6919
2P	**	**	**	—

順位相関係数の検定 [\*、P<0.05 \*\*、P<0.01]

ここで、特筆すべきことは、支持する項目の序列は似ているが、クラス間における項目の支持率には差異がみられるということである。この点については、次節でさらに考察する。

## 5. 項目分析

### 5. 1 クラス間の差

ここでは、クラス間で各項目の支持率に差があるかを分析する。特に割合平均が67%に満たなかった9項目に着目して、クラス間で支持率にどのぐらい差異があるかどうかをみる。【表13】は、2年生の4クラスの割合平均が67%に満たない項目を抽出し、平均を基準として昇順（支持率が低い順）に並べたものである。

これらの全体項目の平均を見ると、最大値が2Bの68.68%、最小値が2Aの46.60%で、クラス間に約22.08%の差（t検定の有意水準5%で有意）が認められる。標準偏差を見ると、最大値が2Pの9.37、最小値が2Aの4.78で、ここでも4.59の差が見られ、各項目の支持率に開きが大きいクラスとそうでないクラスがあることが分かる。

よって、これらの9項目は、支持率がクラスに差があると言える。例えば、2Aは全体にこれらの支持率が低く、項目間のバラツキも小さい。一方、2Pでは、全体に支持率は高いが項目間の支持率には差があるということが明らかになった。

【表13】 クラス間の比較 昇順 分布 (%)

項目	2A	2B	2C	2P	平均
㉒	46.97	60.94	42.19	51.67	50.44
⑭	38.64	59.68	56.25	79.17	58.43
⑳	40.15	71.09	62.50	65.00	59.69
⑪	45.16	75.00	57.81	60.83	59.70
⑤	47.66	68.75	63.28	61.67	60.34
⑯	50.76	64.84	70.31	58.62	61.13
⑬	46.21	70.16	67.97	76.67	65.25
⑨	51.52	71.88	63.71	76.04	65.79
⑩	52.34	75.78	67.19	69.17	66.12
平均	46.60	68.68	61.25	66.54	60.77
SD	4.78	5.75	8.47	9.37	4.86

次に項目間の支持率にクラス間で差があるかどうかを見る。【表14】は、【表13】における各項目の最大値と最小値の差のt検定（片側検定）の結果の一覧である。

【表14】 各項目の最小値と最大値の差のt検定の結果

項目	対象 クラス	統計量:z	片側 P 値	*: P<0.05 ** : P<0.01
㉒	2A/2B	-1.512	0.0653	有意傾向
⑭	2A/2P	-3.295	0.0005	**
⑳	2A/2B	-2.491	0.0064	**
⑪	2A/2B	-2.437	0.0074	**
⑤	2A/2B	-1.710	0.0436	*
⑯	2A/2C	0.0436	0.0533	有意傾向
⑬	2A/2P	13.000	0.0058	**
⑨	2A/2P	-2.059	0.0198	*
⑩	2A/2B	-1.954	0.0253	*
平均	2A/2B	-1.787	0.0369	*

この結果から、項目⑭、⑳、⑪、⑬の4つについては、いずれも有意水準1% (P<0.01) で有意である。項目⑤、⑨、⑩の3項目については、有意水準5% (P<0.05) で有意である。項目㉒、⑯の2つについては、有意傾向(0.05 P<0.10) にあることが分かった。

以上から、これらの9項目に関しては、クラスによって支持率に差異があることが分かった。言い換えれば、これらの指導法を中学生が希望するかどうかは、クラスによって異なり否定的な意識が強いクラスもあれば、それほど否定的でないクラスもあるということである。

### 5. 2 中学生に支持される項目

次に、中学生全体で支持率の高い項目を見る。【表15】は、中学生全体の支持率の平均が80%以上の5項目（降順）と、それらの項目に関する教師の支持率の一覧である。



【表15】中学生の支持率が高い項目 (平均降順) (%)

項目	略称	中学生	教師
④	文法説明	83.37	61.00
①	教師が読む	82.95	83.85
②	すぐ直す	81.90	58.00
⑧	教師説明	81.55	59.00
④	発音練習	80.60	86.00
平均		82.07	69.57
SD		1.11	14.08

中学生に一番支持率の高いのは、項目④ (83.37%) の「文法説明」である。質問文は「詳しい文法説明を受ける」で、この結果から多くの生徒が教師に詳しい文法説明をしてほしいと希望していることが分かる。しかし、この項目では教師の支持率は61.00%とそれほど高くない。文法説明の必要性は場合によって異なるかもしれないが、この調査から分かることは、生徒が希望しているにもかかわらず、文法説明は良いと思う教え方の上位には上がっていないということである。

次に、支持率の高いのは、項目① (82.95%) の「教師が読む」である。質問文は「教師が教科書を声に出して読む」である。この指導法は、教師側も83.85%の高い支持率で、両者の希望と考えは合致している。生徒は教師にモデルリーディングをしてほしいと思っていることが分かる。教師もその有効性を認めていると考えられる。

次に支持率の高いのは、項目② (81.90%) の「すぐ直す」である。質問文は「外国語の誤りはその場で直してもらおう」で、8割以上の生徒が教師に誤りをその場で直してほしいと希望していることが分かる。一方、この項目の教師の支持率は58.00%と低い。よって、生徒と教師の意識の間にはかなりの開きがある。誤りの訂正は、誤りの種類内容、学習目標、授業の目的等、様々な場面があり、生徒の自信や学習意欲を損じないようにするためにもとても慎重な対応が必要である。教師の支持率が低かったのは、このような複雑な思いが原因と推察される。

次に支持率の高いのは、項目⑧ (83.37%) の「教師説明」である。質問文は「教師が語彙 (単語 / 語句) の意味を母語で説明する」で、8割以上の生徒が教師に日本語で説明してほしいと思っていることが分かる。しかし、この項目では教師の支持率は59.00%と高くない。このことから、授業では学習に自分で調べたり、考えさせたりすることが必要であると教師は考えていることが推察される。よって、英語学習において自分で調べることの意義を生徒に伝えることが大切かと思われる。

最後に、項目④「発音練習」は、生徒、教師共に高い支持率で、両者の意識が合致している。

### 5. 3 中学生に支持されない項目

今度は、中学生に支持率が低い学習法がどのような内容か見てみる。【表16】は、中学生全体の平均支持率が

68%未満の9項目 (項目②、⑩は教師側に該当項目無) を昇順に並べ、それらの項目に該当する教師の支持率を一覧にしたものである。

【表16】中学生の支持率が低い項目 (平均昇順)

項目	略称	中学生全体	教師
②	後で直す	50.63	—
⑭	発表する	57.29	82.00
⑩	学習者間	61.32	—
⑯	試験	62.76	70.00
⑪	ロールプレイ	63.23	83.00
⑤	質問に答える	63.50	83.00
⑩	会話文暗記	65.41	74.00
⑨	文を書く	65.88	88.67
⑬	会話練習	67.03	89.00
平均		61.89	81.38
SD		5.10	7.08

中学生の一番支持率の低いのは、項目② (50.63%) の「後で直す」である。質問文は「外国語の誤りは人前で直さないで後で直す」で、これと反対の内容を項目②「外国語の誤りはその場で直してもらおう」で質問し、高い支持を受けていることを先に提示した。両項目の結果には矛盾がなく、この結果から生徒は誤りをできるだけ早く直してもらいたがっていることをさらに強く示唆していると言える。

次に支持率の低いのは、項目⑭ (57.29%) の「発表する」である。質問文は「学習者が発表をする」で、6割以下の支持率である。逆に見れば、4割以上の生徒がこの指導法をあまりやってほしくないと思っているということである。一方、この項目の教師の支持率は82.00%と高く、教師は学習者が発表することをよい教え方であると捉えていることが分かる。生徒が英語を使って発表することは、発信力を高める上でも、英語運用力を高める上でもとても効果のある教え方であると考えられるが、本調査では、生徒と教師の意識の間にはかなりの開きがあることが明らかになった。

次に支持率の低いのは、項目⑩ (61.32%) の「学習者間」である。質問文は「学習者間で外国語でやりとりする」で、6割程度の支持率である。学習者間でやりとりしながら英語を学ぶ方法については、あまり好みではない生徒も4割弱いると言える。関連した指導法として、項目⑪「ロールプレイ」、項目⑤「質問に答える」、項目⑬「会話練習」があるが、いずれも生徒の支持率はそれほど高くなく、コミュニケーションに関わる指導法はあまり好まないのではないかと思われる。

### 5. 4 教師に支持される項目

最後に、教師の支持率の高い項目を見てみる【表17】は、教師の支持率の平均が80%以上の9項目 (降順) とそれらの項目に関する中学生全体の支持率の一覧である。

データは教師の割合を基準に降順に並べたものである。

【表17】 教師の支持率が高い項目 (平均降順)

項目		教師	中学生全体
⑬	会話練習	89.00	67.03
⑨	文を書く	88.67	65.88
⑫	ペアワーク	88.00	75.28
②	学習者が読む	87.00	79.10
③	発音練習	86.00	80.60
⑤	質問に答える	83.00	63.50
⑪	ロールプレイ	83.00	63.23
⑭	発表する	82.00	57.29
①	教師が読む	80.00	82.95
平均		85.19	70.54
SD		3.26	9.11

教師に一番支持率の高いのは、項目⑬(89.00%)の「会話練習」である。質問文は「実際に近い場面を作り会話練習をする」で、教師には最高の支持率を得た。よって、教師はこの指導法を非常によい教え方であると考えていることが分かる。一方、生徒を見ると、この項目の支持率は67.03%とそれほど高くない。よって、教師とは意識が異なることが分かる。

次に、支持率の高いのは、項目⑨(88.67%)の「文を書く」である。質問文は「学習者が文をつくって書く」で教師の支持率は非常に高い。しかし、生徒を見ると、この項目の支持率は65.88%とそれほど高くない。よって、ここでも教師とは意識が異なることが分かる。

この他、項目⑫「ペアワーク」、項目②「学習者が読む」については、教師の方が生徒よりは支持率が高いが、生徒の支持率も高かった。尚、項目③「発音練習」と項目①「教師が読む」については前節(5.2)、項目⑭「発表する」については前節(5.3)で取り上げたのでここでは省く。

以上から、教師がよい教え方として支持する項目は必ずしも生徒に支持されるとは限らないことが分かった。これは、練習方法の有効性や効果とは関わりがないが、生徒の意識を知った上で教えることは大切である。

## 6. まとめ

本調査の結果から以下のようなことが分かった。中学生には本稿で取り上げた学習法について好むも(そうしてほしいと思うもの)のと好まないもの(そうしてほしくないと思うもの)がある。本調査の対象となった中学生の場合、「文法説明」「教師が読む」「教師が説明」など、教師主導の学習法を好む傾向が見られた。一方、「発表する」「学習者間でやりとりする」「ロールプレイ」「質問に答える」等のコミュニケーションを通して学ぶようなスタイルの学習法はあまり好まない傾向が見られた。

また、誤りの訂正においては、中学生はすぐに直してもらおうのを強く望んでいるのに対して、教師は慎重な姿

勢を見せている。これらの意識の差が良くないということではなく、それぞれの立場でより良い指導法(訂正法)を考えている証であると考えられる。

次に、中学生の好む学習法と教師が良いと考える指導法とが必ずしも一致していないことが明らかになった。各項目の支持率をスピアマンの順位相関係数を算出して判定した結果、両者の間に全く序列の相関は見られなかった。逆に、負の相関(反相関)が見られ、好みが反対の傾向が見られた。すなわち、中学生が好む学習法ほど、教師の支持率は低く、逆に教師が良いと思う指導法ほど、中学生には支持されないということが分かった。

さらに、学習法に関する支持率(好みの傾向)は、中学生の学年間、学校間、クラス間でも順位相関が見られた。よって、学習法の好き嫌いの序列の傾向は、学年間、学校間、クラス間で類似していることが分かった。

一方、中学生が支持しない9項目について、各項目がクラス間で支持率に差があるかどうかを見たところ、9項目中7項目で有意差が認められた。また残りの2項目も有意傾向が見られた。よって、項目別に見ると、支持率はクラスによって異なることが明らかになった。すなわち、個々の教室活動等に対して否定的な傾向が強いクラスもあればそれほど強くないクラスもあることが示唆された。

## 7. ディスカッション

本稿で明らかになった、中学生の学習法(指導法)に対する好みの傾向は、被験者が限られているので、これが中学生の傾向であると一般化することはできなが、対象となった2つの中学校は、異なる市町村にあり、授業を担当する教師も異なるにも関わらず、好みの序列では類似した傾向がみられたことは、特筆に値する。

一方、好まないという傾向はクラス間で共通であるが、好まない程度はクラスによって異なることが分かった。これは、何らかの原因で好みの度合いに差が出るということである。その原因が教師の指導法に起因するのか、学習者の個性やストラテジーに起因するのかは、この調査からは特定できないが、好まない傾向は絶対的なものではないということを示唆している。もし、これらのクラスの構成員が同質だと仮定すれば、環境的な要因が好みに影響を及ぼしている可能性もある。

その一因として、教師の指導のしかたが考えられる。本稿でとりあげた22項目は中学校の英語教育で一般に使われる指導法である。また、調査対象となったクラスでも多かれ少なかれこれらの指導法の幾つかを用いて授業が進めていると思われる。どの指導法も教師によって微妙に展開の仕方は異なるであろう。習熟度や学習単元の内容等によっても学習者側の捉え方は変わるだろう。

## 8. 教育への示唆

本研究の結果から、教室活動等について教師の指導法と学習法に対する捉え方は教師と生徒間で異なる場合もあることが分かった。よって、教室活動を行うにあたっては、教師はまず、自分の担当するクラスの生徒がどのような教室活動等を希望しているかを知ることが授業案、指導案を立てる上で最も大切なことの1つではないかと思われる。なぜなら、教師が良いと考える教室活動等でも、学習者には必ずしも好まれているとは限らないからである。それがどういう項目か、どの程度嫌いであるかなどは習熟度、学習内容、学習者の性格等によって異なるかもしれない。もし、学習者が好まない教室活動等を強いられた場合、英語嫌いを助長するのではないかと思われる。

例えば、会話練習、ロールプレイ、発表等は、一般に発話の力を上げるのに効果的な指導法と考えられる一方で、好まない学習者もいることを配慮して、導入を工夫する必要がある。学習者の気持ちや個々の学習ストラテジーにも気を配り、好まない指導法を強いることがないようにすることが、英語ぎらいを増やさないことに繋がるのではないかと考えている。特に学習者が好まない指導法については、その意義、有効性、効果、学習効果等を生徒に十分に説明して納得させてから授業を行うことがより授業の効果を上げることに繋がると考えられる。

さらに、学習者の好む方法を取り入れて教えることも大切である。勿論、生徒の希望する説明の方法や指導法が必ずしもその授業で有効かどうかは分からないが、学習者の側に立って授業を進めることは、「英語好き」を促進する一手段であると考えられる。

最後に、誤りの訂正に関しては、教師と学習者(中学生)の間で大きな意識の違いが見られた。学習者はすぐに直すことを望んでいるが、教師は躊躇している。これは、生徒に人前で恥をかかせないようにすることへの配慮と推察される。教師が生徒が英語嫌いにならないように注意を払っていることは確かである。本研究から得られた知見が今後の英語指導に幾分でも役立つことを願う。

### 注

<sup>1</sup> 教員に対する調査は、小牧市の小中学校教員研修会の席で参加者に依頼して実施した。中学生の調査は、研修会参加者の勤務校の中で協力していただける学校に依頼した。

<sup>2</sup> 名古屋市内の中学校の教員への調査は、まとまった数のデータを収集することが出来なかった。査読者の1人より、「小牧市の教員だけを対象としている理由が分からない」とのご指摘を受けた。本来なら名古屋市内の教員のデータも収集すべきであるが、それは

叶わなかった。

<sup>3</sup> 査読者の1人より、「教師平均値の差の統計的有意差の検定はしないのか」というご指摘をいただいた。本来ならすべての値について統計的有意差の検定をすべきであろうが、本論では後続の分析の中でこれらの項目について、支持率の高いもの、低いものに分類して分析しているので、その分析と考察が重複すること、及び、紙面の制約もあり、ここではご指摘のあった検定を省いた。

### 謝 辞

アンケート調査にあたっては、多くの方々のご協力を得ました。この場をかりて御礼申し上げます。また、本稿をまとめるにあたっては、査読者の方々から有益なご意見をいただきました。筆者の力不足から十分には活かせませんでした。御礼申し上げます。

### 引用文献

- 糸井江美 (2003).「英語学習に関する学生のビリーフ」『文教大学文学部紀要』16 (2), 85-100.
- 稲葉みどり (2013).「学習者の希望と教師の理想 - 外国語の授業における一致・不一致を考える -」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』3, 45-52.
- 稲葉みどり (2014).「外国語学習のビリーフの考察 - 愛知教育大学の1年生の場合」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』4, 149-156.
- 稲葉みどり (2015).「小中学校教師の外国語学習のビリーフ - 教師間、及び、大学生との比較 -」『愛知教育大学研究報告, 人文・社会科学編』64, 19-27.
- 岩井誠二・岩澤和宏 (2004).「ハンガリー人日本語学習者のビリーフス」『国際交流基金日本育紀要』14, 123-140. 国際交流基金日本語国際センター.
- 岡崎智己 (2001).「母語話者教師と非母語話者教師のBELIEFSの比較 - 日本と中国の日本語教師の場合」『日本語教育』110, 110-119.
- 小原亜紀子・栗原明美 (2008).「インドネシアにおける高校日本語教師研修に関する一考察 - 西ジャワ州・東ジャワ州のビリーフ調査を通じて -」『国際交流基金日本語教育紀要』4, 27-40.
- 笠島茂・サイモン・ボーグ (2009).『言語教師認知の研究』開拓社叢書 19, 東京: 開拓社.
- 片桐準二 (2005).「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習のBeliefs - フィリピン大学日本語受講生調査から -」『国際交流基金日本語教育紀要』1, 85-110.
- 久保田美子 (2006).『国際交流基金日本語教授法シリーズ第1巻「日本語教師の役割/コースデザイン」』ひつじ書房.
- 坂井美佐 (2000).「中国人学習者の日本語学習に対する



- について－香港4大学アンケート調査から－』『日本語教育』104, 69-78. 日本語教育学会.
- 佐藤敏子 (2006). 「学習信条と学習効果－BALLIを使用した調査－」『つくば国際大学紀要』12, 1-6.
- 高崎三千代 (2014). 「メキシコにおける日本語学習者の特性－ビリーフ調査結果を中心に－」『国際交流基金日本語教育紀要』10, 23-38.
- 波多野五三 (2010). 「英語教師のビリーフに関する考察－成長指標としての構成主義的授業観－」『英語英米文学研究』18, 105-161.
- 本田勝久・小川一美・川本圭司 (2008). 「外国語活動必修化への提言－小学校教員の意識調査を通じて」『大阪教育大学紀要第V部門』57-1, 13-30.
- 和田衣世 (2007). 「スリランカの大学生の言語学習のビリーフから日本語教育改善を考える」『国際交流基金日本語教育紀要』3, 13-28.
- Borg, S. (2001). Teachers' Beliefs. *ELT Journal*, 55 (2), 186-188.
- Borg, S. (2006). *Teacher Cognition and Language Education*. Continuum: London.
- Farrell, T. (2007). *Reflective Language Teaching: From Research to Practice*. London: Continuum.
- Horwitz, E.K. (1985). Using student beliefs about language learning and teaching in the foreign language methods course. *Foreign Language Annals*, 18 (4), 333-340.
- Horwitz, E. K. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden, & J. Rubin, *Learner Strategies in Language Learning* (pp.119-129). Prentice-Hall International.
- Lightboun, P. N., & Spada, N. (1993). *How Languages Are Learned. Second Edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Pajares, F. (1992). Teachers' beliefs and educational research: Clearing up a messy construct. *Review of educational research*, 62 (2), 307-332.
- Richards, J. C., & Lockhart, C. (1996). Exploring teachers' beliefs. In J. C. Richards, & C. Lockhart, *Reflective Teaching in Second Language Classrooms* (pp. 29-51). Cambridge: Cambridge University Press.

【連絡先 稲葉みどり

E-mail: mdinaba@aeu.ac.jp



# How to Make Students Like Learning English: Students' and Teachers' Feelings About Activities in English Class

Midori Inaba

*Faculty of Education, Aichi University of Education*

## Abstract

This study investigates the perception of common foreign language (English) classroom teaching and learning methods between students and teachers in middle school and is concerned with whether or not teachers' and students' preferred methods are in agreement.

Students were asked whether or not they would like to study using twenty-two different classroom activities, such as reading, writing, listening, translation, grammar explanation, conversation practice, role play, peer work, songs, language games, presentation and error correction etc. Teachers were asked whether or not they thought those same activities were good for instruction.

The Likert scale-based questionnaire was analyzed to determine the degree to which activities middle-school students liked and which activities teachers thought were good. Data was compared between teachers and students, and between students of different years, classes, and schools.

The research brought about the following results. The middle-school students appear to favor instructor-led methods, such as grammar explanations, teacher readings, and teacher explanations. They tend to give a lower ranking to types of learning brought about by communication, such as presentations, practice between students, role-playing, or asking questions. When it comes to fixing mistakes, students exhibited a strong desire to have errors fixed quickly, while instructors demonstrated attitudes of careful error correction.

There is a negative correlation between the teaching methods instructors think are good and that students prefer, and instructors' ratings of the activities which the middle-school students preferred are low. Conversely, students tended not to show support for the methods that teachers ranked as good. Furthermore, the ranking of the liked and disliked classroom activities studied is similar between different classes, grades, and schools.

There are some lessons to be learned from comparison of the approval ratings of the nine least-liked activities. As some classes ranked the activities extremely low while others were not so severe, a distinction is apparent between classes in the degree of their negative reactions. The rankings are similar, but the approval ratings vary from class to class. One class, for example, rated those bottom nine activities at around 40%, while another ranked them at 60%, in a similar order. Ratings of seven out of the nine activities are significantly different between the classes.

The results of the research make it clear that students' and teachers' perceptions of classroom activities are not necessarily in agreement. There are limiting factors in the investigation: it is difficult to generalize personal tastes, and it cannot be said that students' preferred methods are entirely connected to learning well in the classroom. However, it may still be important for instructors to bear in mind how the students in their classes hope to be taught and learn, and prepare lesson plans with knowledge of their students' states of mind.

## Keywords

foreign language classroom, English-language education, classroom activities, students' preferred methods